

と血中濃度からクリアランスの推定が可能であった。1名の健常成人ボランティアについて、dipyridamole負荷時のクリアランスの上昇について検討した結果、TFでは、有意な変化は認められなかつたが、TI、MBにおいて有意な上昇(約1.5倍)が認められた。本法は、心筋クリアランスの経時的变化のモニタリングが可能であり、心筋血流SPECTの定量化において有用な方法と考えられた。

17. 負荷および追加投与²⁰¹Tlシンチグラムの有用性の検討

伊藤 久雄 武田 賢

(宮城県立瀬峰病院・放)

冠動脈疾患18例の運動負荷および追加投与による心筋SPECT検査を施行した。心筋を13区域に分割し、負荷時、後期再分布時および追加投与後の区域別最高カウントの平均カウントを求めた。横軸に区域、縦軸に平均カウントをとり、負荷時、後期、追加投与の3曲線を描いたところ、3Typeに分類することができた。Type1はStress後のカウントが最も高く洗い出し率も良好で、追加率は小さかった。最も心筋灌流の障害の程度が少ない群と考えられた。Type2はStress後のカウントは低く、洗い出しは中間であったが、追加率が最も高かった。この群では広範囲の心筋梗塞のため初期カウントが少ないが、生存心筋が残存するため追加率が高いと推定された。Type3ではStress後のカウントは中間であるが、洗い出し率は最も低く、追加率の増加は中間であった。この群では多枝病変による広範囲な虚血が洗い出し率を高度に低下させており、後期撮像時になお不完全再分布の状態のため、追加投与により集積を認めるものと推察した。

18. 潰瘍性大腸炎とクローン病における^{99m}Tc-白血球イメージングの診断能

油野 民雄 斎藤 泰博 秀毛 範至
山本和香子 薄井 広樹 (旭川医大・放)
佐藤 順一 石川 幸雄 (同・放部)
綾部 時芳 高後 裕 (同・三内)

炎症性腸疾患である潰瘍性大腸炎とクローン病における^{99m}Tc-白血球イメージングの診断能を検討した。

潰瘍性大腸炎35例とクローン病10例における白血球イメージングの陽性率は、それぞれ24例の69%と2例の20%であり、潰瘍性大腸炎で有意に高率に陽性結果を示した。ヒトの炎症性腸疾患モデルである2,4,6-trinitrobenzene sulfonic acid(TNBS)惹起性ラット大腸炎で検討した結果、TNBS投与4日後(潰瘍性大腸炎モデル)では^{99m}Tc-顆粒球の集積を認めたのに対し、投与3週後では^{99m}Tc-リンパ球の集積を認め、主たる浸潤細胞の相違が、上記診断成績に大きく関与していることが推察された。

19. 間置空腸十二指腸切除術例における胃・肝胆道デュアルシンチグラフィによる胃内容および胆汁の逆流の評価——サブトラクションによる検討——

三浦 弘行 板橋 陽子 淀野 啓

野田 浩 近藤 英宏 阿部 由直

(弘前大・放)

脾頭部領域の術式として行われている間置有茎空腸脾十二指腸切除術が施行された11例に¹¹¹In-DTPAおよび^{99m}Tc-PMTの胃・肝胆道デュアルシンチグラフィを行い、胃内容や胆汁の逆流の評価を行った。逆流疑い例にはsubtractionも施行した。胆汁の胃への逆流は6例に、胃内容の胆管への逆流は2例に疑われたが、サブトラクション等も相補的に評価することによって、前者は3例、後者は1例に逆流が確認された。胃・肝胆道デュアルシンチグラフィは胃内容や胆汁の排出動態を評価する優れた検査法であり、さらにサブトラクションは逆流を明瞭化し、有用である。

20. GSA肝シンチグラフィにおける肝摂取速度比曲線の有用性について

阿部 養悦 佐藤 和宏 亀谷 一樹
(東北大・放部)

山崎 哲郎 金田 朋洋 桂塚 崇
箕浦衣里子 山田 章吾 (同・放)
丸岡 伸 (同・医短)

^{99m}Tc-GSAの肝への取り込み速度の変化率の差(肝摂取速度比曲線)による肝機能の評価方法が有用であったので報告する。肝臓および心臓にROIを設定